

平成30年度 佐世保市学力調査 佐世保市の結果・改善策等について

佐世保市教育委員会 学校教育課

1 調査対象・人数

本市では小学校及び義務教育学校前期課程4年生 2,259名、中学校及び義務教育学校後期課程1年生 2,020名を対象に実施。

2 教科別領域別結果

(1) 小学校及び義務教育学校前期課程 4年

教科	国語					算数				
	話す 聞く	書く	読む	言語	全体	数と 計算	量と 測定	図形	数量 関係	全体
市平均正答率	64.7	61.1	63.0	70.9	66.6	73.2	70.5	76.0	77.3	73.5
全国平均正答率	67.0	63.6	66.1	74.6	69.6	75.7	74.5	78.8	80.3	76.4
全国比達成率%	96.6	96.1	95.3	95.0	95.7	96.7	94.6	96.4	96.3	96.2

(2) 中学校及び義務教育学校後期課程 1年

教科	国語					数 学				
	話す 聞く	書く	読む	言語	全体	数と 計算	量と 測定	図形	数量 関係	全体
市平均正答率	60.5	44.1	55.6	69.5	59.4	77.0	70.2	68.8	67.9	71.0
全国平均正答率	63.1	51.9	57.6	71.8	62.7	78.4	71.2	70.6	70.3	72.8
全国比達成率%	95.9	85.0	96.5	96.8	94.7	98.2	98.6	97.5	96.6	97.5

3 課題と分析及び改善策 (○…よくできていること ▲…課題 ▲▲…昨年度に続く課題)

教科	課 題	分 析	改 善 策 (例)
前期課程 国語 小学校及び義務教育学校	○話題に沿った意見と理由を考えて話すことができる。 ○段落の役割を理解して、文章の内容を的確に読み取ることができる。		
	▲▲ローマ字のつづりを理解することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ローマ字を覚えさせる、単語を書かせる、読ませるだけの授業になりがちであるため、十分に定着していない。 大文字や小文字等、覚えることが苦手な子には負担が大きく、学習意欲が不足している。 配当時間が短く、習熟するための練習が家庭学習中心となるため、定着度の個人差が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ローマ字と五十音表との共通点などについて話し合わせるなど、ローマ字の規則性や良さに自分たちで気づかせ、興味を高める。 総合の調べ学習でパソコン入力をさせるなど活用する場を増やし、繰り返し使うことで定着を図る。 定期的に小テストなどを行い、定着を図る。
	▲伝えるべき事柄を適切に挙げて話したり伝えるために効果的な方法をとったりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 構想メモをもとに原稿を書いたり、話したりする経験が不足しているため力が身に付いていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的意識を明確にしたペア・グループ学習の中で、発表原稿を活用したり、理由や事例などを挙げたりしながら話す対話的な学びを取り入れる。 日常行われているスピーチ活動と関連付けた指導を行う。

前期課程 算数 小学校及び義務教育学校	○小数の意味や表し方は理解できている。 ○文章問題の立式はできる。		
	▲▲数直線上に示された分数を読み取ったり、単位分数のいくつ分の大きさを求めたりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 1の概念が分かっていないため、数直線上に記されている1目盛りの意味を理解できていない。 教科書の数直線ではすべて右端の目盛りが1になっているため、本当に理解できているのか確認ができない。 	<ul style="list-style-type: none"> 1を基準として単位分数の個数に着目するとともに、数直線図などをもとに単位分数のいくつ分という考え方を意識させる授業を位置付ける。 数直線図等で整数と分数の違いを意識させることで、分数のよさを実感させる。
	▲除法を適用し、余りについて理解したり、切り上げて処理したりすることを説明できる。	<ul style="list-style-type: none"> 除法の余りを図で確認し計算の技能を高めているが、余りがでたことによって、その余りをどのように処理するのか日常生活の中で考える時間が充分確保されていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 図を用いて、余りの意味を考えさせる。 余りが出た場合の処理の仕方を考える問題を日常生活と関連づけながら考える場面を設定する。
後期課程 国語 中学校及び義務教育学校	○小学校で学習した漢字を読むことができる。 ○話の内容を正確に聞き取ることができる。		
	▲3段落構成で文章を書くことができる。	<ul style="list-style-type: none"> 段落構成について構想を練る活動が不足しているため、100字を超えるような文章を書く際に段落ごとの役割を意識して書く力が定着していない。 	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこと」領域の授業の際に、生徒が100～200字程度の文章を書く活動を意図的に取り入れる。さらに、構想メモを書く活動の中で、段落の役割（段落構成）について考えさせる場面を意図的に設定する。
	▲自分の取った立場の理由を書くことができる。	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの意見を交流する場面で、論点を踏まえて活動することが十分でないため、自分の意見を論理的に構成する力が定着していない生徒が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 「話すこと聞くこと」領域の授業に限らず、多くの授業場面で、対話活動（生徒が発信と受信を繰り返し行える活動）を積極的に設定することで、自分が伝えた意見が相手に伝わっているか振り返るとともに、自分の伝え方を評価する力を伸ばす場面を意図的に取り入れることができるようにする。
後期課程 数学 中学校及び義務教育学校	○与えられた比と、等しい比ではないものを選ぶことができる。		
	▲▲百分率について理解し、割引後の代金を求める式を選ぶことができる。	<ul style="list-style-type: none"> 基準量を100として、それに対する割合で表す方法（百分率）や、基準量を1として、それに対する割合で表す方法について、小数で表すことができない。 	<ul style="list-style-type: none"> 「文字を使った式の表し方」を学習する前に、既習事項の確認（割合・百分率）を行う。割合・百分率については、テープ図や数直線など、数量の関係を視覚的にとらえられるように工夫する。

	<p>▲2つの整数の最大公約数を求めることができる。</p>	<p>・約数や倍数、公約数や公倍数など、どのような数のことをいうのかを知らない。</p>	<p>・「正負の数」や「文字と式」における分数を含む計算や分数を含む「方程式」を解く際は、分母の「最小公倍数」を意識させる指導を行うとともに、「約数」と「倍数」の違いにふれる時間を設ける。</p>
--	--------------------------------	--	--

4 考察

昨年度と本年度の標準スコアを比較すると、ほとんどの教科において、数値が微増しており、学力の伸びが見られるが、依然として全教科全ての領域において全国平均を下回っている。

児童生徒に身に付けさせたい力を明確に位置付けた単元づくり・授業づくりを行うことで市全体として改善をはかっていきたい。

以下、各教科の分析を通して考えられる全般的な改善策を述べる。

【小学校及び義務教育学校前期課程 国語】

- 「国語辞典の使い方」については改善傾向が見られるが、「ローマ字の定着」は継続課題である。「主語と述語」や「漢字の読み書き」は、単元で扱う時はしっかり指導されているが、さらに物語文や説明文を読む時や生活の中で繰り返し確認することで、確実な定着につながる。このことに関連して、中学校及び義務教育学校後期課程国語の「条件作文」や中学校及び義務教育学校後期課程数学の「最大公約数の計算」など、授業においては理解できたことが、習熟不足のために十分に定着していない様子が伺える。定着にいたるまでの繰り返す指導の徹底が求められる。

【小学校及び義務教育学校前期課程 算数】

- 当該学年で定着しなければ次学年以降の学習に影響を及ぼす。当該学年での学習内容はもちろんのこと、他学年とのつながりを教師が確認することが重要である。その学習内容が確実に定着をしてつなげていかなければならない。また児童は問題文を読んで立式はできる。授業の中でキーワード等に注目させた指導の成果である。しかし、式や導き出した答え等の意味の理解ができていない。図などを用いて、説明をすることにより「式から図へ」「図から式へ」と見方・考え方を深めていく継続的な指導が必要である。

【中学校及び義務教育学校後期課程 国語】

- 生徒が、自己の思いや考えを発信する場面を授業において保障する必要がある。生徒自身が表現する活動を通してよりよい伝え方について学ぶ場面を設定することで、文章構成について工夫しながら表現する力を定着させることができる。また、生徒が自分や級友が書いた文章を評価し合う活動を、授業において積極的に取り入れる必要がある。単なる情報の発信でなく、受信した情報を自身の発信につなげるなど条件に応じて情報を発信し合う活動することで、互いの発信の仕方について評価するための視点を定めることができる。この視点を基に質の高い評価を目指して意見交換をすることで、表現をよりよいものとする力の向上が図れると考える。

【中学校及び義務教育学校後期課程 数学】

- 生徒が既習事項について定着できていない状況で、新規学習内容を理解して定着につなげることは難しい。小学校や中学校及び義務教育学校（後期課程）の前学年までに学習した内容が、これから生徒が新しく学習する単元（内容）と、どのようなつながりがあるかについて、教師がしっかりと見通した上で指導することが大変重要である。

特に、算数科で学ぶ「割合（百分率）」については、数学科においても学習を進める上で、考え方を深めるための土台となる部分であることを意識したい。また、日常生活の中で用いられている割合の便利な表現であることに気付くことができるように指導することも大切である。「最大公約数」や「最小公倍数」については、形式的に求めることに偏ることなく、具体的な場面に即して取り扱うようにし、特に意味の理解を図るようにする。

